A12

国立大学法人における
病院図書室 ･大学図書館との連携について

土出郁子
愛媛大学図書館医学部分館

1. 問題の所在

国立大学は法人化後，大学の役割を以前の「研究・教育」から「教育・研究・地域貢献」の三本立てへと変更しつつある。図書館もそれは例外でなく，とくに地方の国立大学図書館において以前にもまして「地域との連携」を思わせる動きが活発である。学外者(一般市民)の閲覧・貸出利用，公立図書館との協定に基づく地域図書館ネットワークへの参加,「図書館友の会」等の設置，などが具体例として挙げられる。従来活発には行われていなかったこれらの取り組みは一定の評価を与えられるべきものではあるが，図書館において「地域貢献」といったときに，それは「外部の図書館との連携」のみを指すわけではない。

また医療従事者へのサービスを対象にした図書館の連携として，大学図書館・病院図書室のネットワークを形成している例はあるが，直接には一般市民への医療関連情報提供を目的とするものではない。

そこで，大学図書館と医学部等附属病院の図書室の連携は，一般市民への直接の医療関連情報サービスを可能にすると考える。実際に先駆的な取り組みは数例あり，これらの取り組みや考えが現在どれほど共有されているか調べたい。

2. 方法

国立大学法人で医学等の研究科・学部，附属病院，ならびに医学系図書館を有する大学 42 大学を対象に調査する。具体的には病院と図書館のホームページ調査・担当部署へのアンケート調査を行い，実態と担当者の意識についてまとめる。

3. 結果

ホームページによる調査では，患者・一般市民のための図書室等についてホームページ上に記載のある病院は全体の 4 割程度であった。開館日や運営形態もさまざまであるが，殆どの図書室等でスタッフは病院ボランティアである。また大学図書館で患者図書室について記載のあるものはみあたらず，学外者への利用案内のうち，附属病院入院患者への案内を別に記載しているところは３館であった。

詳細，アンケートによる調査結果，全体のまとめは当日発表する。